博山炉原型考

―― 崑崙山との関係を中心に ――

長　村　真　吾

はじめに
一．博山炉の原型に関する諸説
二．博山炉の動物意匠と崑崙山
三．博山炉の形態と崑崙山
四．博山炉の天の特徴と崑崙山
おわりに

はじめに

『西京雑記』第一[1]に、

長安の巧工の丁緩なる者〔中略〕又九層博山香爐を作る。鏤(かざ)りて奇禽怪獣を為り、諸の霊異を窮め、皆自然に運動す。

（長安巧工丁緩者〔中略〕又作九層博山香爐。鏤為奇禽怪獣、窮諸霊異、皆自然運動。）

とあり、長安の丁緩という工匠が霊妙な奇禽怪獣で飾り立てた九層の博山香爐なる香炉をつくったという。これがいわゆる博山炉[2]に関する最古の記述である。

近年、中国各地で漢墓の発掘が進むにしたがい、この博山炉と考えられる遺物が数多く発見されている。例えば、1968年、河北省満城県陵山の中山王劉勝（前113年没）夫妻の墓から図１に示した博山炉が発掘されている[3]。

この満城漢墓で発見された博山炉は以下のような特徴を持っている。蓋はいくつもの層をなして聳える険峻な山の峰を表しており、細い金線などで象嵌が施されている。地勢に沿って、目立

[1] 前漢の劉歆撰と伝えられているが、現在のところ、この撰者が誰なのかという問題は未確定である。神田・山根［1989］p190、五井直弘執筆を参照。

[2] ただし、筆者が収集した漢代の博山炉の図版や発掘報告などを見ても「博山炉」という銘文は一切見当たらなかった。このことに関しては小杉一雄氏の考証によって、博山炉の銘文に「長安下頡宮銅熏炉、重四斤五両、神爵元年□□。」とあるように、漢代では博山炉のことを「熏炉」と呼んでいたことが明らかとなった。また、筆者の調べた結果、博山炉の銘文には「熏炉」の他にも「張端君錯廬一」のように「錯廬」と呼ばれていたことが新たに分かった。銘文に関しては、小杉［1959］p 43-44・湖南省博物館［1966］を参照のこと。

[3] 樋口［1988］p88参照。

たないような孔がいくつか開いていており、香を焚いた際、孔から立ち上る煙を深山に漂う雲気のように見せる工夫が施されている。山の中には虎や豹、猿、猪を追う狩人などが鋳込まれ、炉の器身と脚部は別鋳で、鉄釘により接合されている。器身の上部には蓋に合わせた形で山岳が作られ、全体に金象嵌で雲気文が表されており、脚部から下の座にかけては、3匹の龍の文様が浮き彫りされ、座の縁には巻雲文が表されている[4]。

このように、いくつもの層をなして聳える険峻な山の峰を表した蓋があり、山型の器身部分を細い脚部が支えている特徴を備えた香炉を一般に博山炉と呼ぶ。また図2のように湯を入れるための承盤が付随しているものもある[5]。

このような特徴を持つ博山炉が何を象ったものであるのかというと、諸説あるものの実は未だに明らかにはなっていない。

一．博山炉の原型に関する諸説

漢代に最も流行した博山炉が何を象ったものかということに関しては、古来、諸説紛糾している。そこで、博山炉の原型について論ずる前に、従来の説を整理・検討する必要があると思われる。

まず博山炉は「博山」という山を象ったものであるという説がある。宋代の呂大臨は博山炉に関して『考古図』巻10で、

> 晉の東宮の舊事に曰く、太子の服の用に則ち博山香爐有り、海中博山を象る、と。下に槃有りて湯を貯へ、潤氣をして香を蒸さしめ、以て海の回環するを象る。
>
> （晉東宮舊事曰、太子服用則有博山香爐、象海中博山。下有槃貯湯、使潤氣蒸香、以象海之回環。）

と述べ、湯を張った承盤を海に見立てることで、海中にある博山を象っていると考えている。

また「博山」の「博」が「Bog」の音訳であるということから、長井行氏は、この香炉の形状も名称も共に天山山脈中の高峰ボグド・ウラからとったものと主張しておられる[6]。

長広敏雄氏は、博山炉は山東省青州にある博山を象ったものと述べておられる[7]。呂大臨は海中の博山を象ったものと考えているのに対し、長広氏は山東省に実際にある博山という山を象ったものと考えておられる。

さらに最近では趙容重氏も博山炉が「博山」という東方の神山であると解釈しておられる[8]。

4　曾布川・谷［1998］p360　他にも中国社会科学院考古研究所［1980］上p63を参照。

5　他にも参考図9・11・13・16を参照のこと。脚部は様々な意匠が施されるものの、基本的な形態は同じであるので、これらの香炉も図1と同様に博山炉と見なす。

6　長井［1903］参照。

7　下中［1952］p21参照。

8　趙容重［1994］参照。

しかし、これらの博山説に関して、小杉一雄氏は「博山という地名は前漢末から後漢初期にかけての極めて短期間とみるべきである。『漢書』地理志や孔光伝からは、香炉の名称と結んで考える上に何らの理由も見出せない。」[9] と批判しており、漢代では山型の蓋を持つ香炉を「博山炉」とは呼んでおらず、単に「熏炉」と呼んでいたことを明らかにされた[10]。また、全榮來氏も、博山という地名解きが、博山香炉の起源や型式を明らかにするためにいかなる助けにもならないと指摘され[11]、今では博山説は妥当性がないものとされている。

次に博山炉を東海の仙山である蓬莱山を象ったものとする説もある。宋代の龍大淵は『古玉図譜』巻79で、

> 炉下の承盤の湯を貯へて香を薫ずるは、大瀛海を象るなり。蓋上の三峯は蓬莱三島を象るなり。
>
> (炉下承盤貯湯薫香、象大瀛海也。蓋上三峰象蓬莱三島也。)

と述べ、蓬莱山説をとっている。また中野美代子氏は「海中の仙山を象った香炉を博山炉という。」[12] と述べておられる。蓬莱説の根拠は湯を貯える承盤であるが、承盤のない博山炉も存在するため、承盤のみで博山炉を蓬莱山と決めることはできないと思われる。

重田定一氏は「博山香炉の形式は陳敬の香譜に漢武有博山炉、西王母所遺といえるが如く、全く西域伝来のものにして」と述べ、その山型の蓋は須弥山を象ったものとされているが[13]、博山炉は仏教が盛んになる前からあり、これも根拠としては不十分である。

そして華山説である。全榮來氏は、西域から香料が伝わったことと、博山と呼ばれるいわゆる山岳重畳文が、満城漢墓を起点とする漢代中期の西北地方からもたらされたということから、その山型蓋のモデルは西岳の華山であると述べておられる。その根拠は『北堂書鈔』巻135の伝劉向作の香炉銘にある

> 嶄巖として山の若く、上は太華を貫き、承くるに銅盤を以てす。
>
> (嶄巖若山、上貫太華、承以銅盤。)

という記述と『太平寰宇記』所引の『名山記』(作者不詳)の

> 華岳に三峯有りて、直上數千仞なり。其れ廣くして峰峻疊秀、嶺表に迄ぶまで、削成するが如き有り。今の博山香爐、形は實に之に象る。
>
> (華岳有三峰、直上數千仞。其廣而峰峻疊秀、迄於嶺表、有如削成。今博山香爐、形實象之。)

という記述である。しかし『北堂書鈔』の記述は明の陳禹謨の補注であり、『太平寰宇記』も宋の楽史の撰である。よって、これらの史料のみを根拠とするのは信憑性に欠ける。

---

9 小杉一雄 [1959] p 89参照。

10 小杉氏は前掲書の中で、博山とは装飾物に「博山」と呼ばれているものがあり、それと山型香炉の類似性から博山香炉と命名したということを明らかにしておられる。

11 全榮來 [1996] 参照。

12 中野 [1991] p 49参照。また、ここで言う「海中の仙山」とは蓬莱三島のことである。

13 重田 [1904] 参照。

最後に、小杉氏は、博山炉に関して、特に何の象徴かを言及されていない[14]。

このように、これまでの博山炉の原型に関する説は「博山説」「蓬莱山説」「須弥山説」「華山説」の「博山炉名山説」が唱えられてきたが、どの説も根拠として不十分な点が多い。だが、基本的に博山炉の原型が何らかの名山であるという点から考察を進めていくことには賛成である。香炉には図3のように山型の蓋でないものも多数あり、機能の上でも蓋に山型意匠を施す意味はない。ならば、これは漢代人が何らかの意図を持って製作したものであり、象徴と考えるべきである。

そこで、筆者は従来の諸説と同様に博山炉の原型が何らかの名山であるという点を踏襲しつつ、更に数多くの漢代博山炉の図版を収集して、その意匠や形態と文献史料とを照らし合わせて考察し、博山炉の原型が何を象ったものであるかを明らかにしたい。

二．博山炉の動物意匠と崑崙山

1．虎・豹に見える崑崙山

博山炉は、全榮來氏が「博山蓋の発生が満城漢墓にある」[15] と述べられているように、漢代の武帝期頃にその形が確立したと考えられる。博山炉の原型を考える上で、初期の博山炉の意匠は特に重要であるので、この満城漢墓出土の博山炉を中心に、まずは動物意匠を見ていくことにする。

満城漢墓から出土した博山炉は二点あるが、図1には虎や豹が描かれており、図2にも虎が描かれている。では虎や豹が象徴する山は何であろうか。『山海経』大荒西経には、

人有り、戴勝し、虎歯にして豹尾有り、穴處す。名づけて西王母と曰ふ。

（有人、戴勝、虎歯有豹尾、穴處。名曰西王母。）

とあるように、虎や豹は、中国の西北にある神話伝説上の神山である崑崙山に住んでいるとされる西王母の特徴であった。また、同書西山経には、

西南四百里を、昆侖の丘と曰ふ。〔中略〕神陸吾之を司る。其の神の狀は虎身にして九尾、人面にして虎爪。

（西南四百里、曰昆侖之丘。〔中略〕神陸吾司之。其神狀虎身而九尾、人面而虎爪。）

とあり、同書海外西経に、

昆侖の南淵は、深さ三百仞。開明獸、身の大いさは虎に類して、九首皆人面なり。東嚮して昆侖の上に立つ。

（昆侖南淵、深三百仞。開明獸、身大類虎、而九首皆人面。東嚮立昆侖上。）

14　小杉［1959］参照。

15　全榮來［1996］参照。

とあるように、崑崙山に住むといわれる陸吾や開明獣もまた虎の特徴を持っている。つまり虎や豹は崑崙山の象徴的動物であったと考えられる。

2．博山炉に見える崑崙山に住むその他の動物

図1・図2の博山炉には、虎と豹以外にも龍・羊・猿が描かれている。これらの動物にはどのような意味があるのだろうか。

龍は東の象徴であり、一見西北の崑崙山と関係がないと思われるが、実は龍と崑崙山は密接な関係がある。『楚辞』離騒には、

> 玉虬を駟として以て鷖に乗り、溘(たちま)ち風に埃あげて余上り征く。朝に軔を蒼梧に發し、夕に余縣圃に至る。
>
> （駟玉虬以乗鷖兮、溘埃風余上征。朝發軔於蒼梧兮、夕余至乎縣圃。）

とあり、「縣圃」というのは『淮南子』地形訓に、

> 縣圃・涼風・樊桐は、昆侖の閶闔の中に在り、是れ其の疏圃なり。
>
> （縣圃・涼風・樊桐、在昆侖閶闔之中、是其疏圃。）

とあるように、崑崙山の一部であるので、それは崑崙山に向かう場面であるということが分かる。この離騒の主人公である正則は、四頭の虬龍にひかせた鷖という大鳥のかつぐ車に乗って崑崙山に向かったのである。また、『河圖括地象』には、

> 崑崙の弱水中は、龍に乗るに非ざれば、至るを得ず。
>
> （崑崙之弱水中、非乗龍、不得至。）

とあり、崑崙山にある弱水は龍に乗らなければ渡ることが出来ないのである。このように崑崙山に向かうために龍は必要なものであった。

次に、羊は『山海経』西山経に、

> 獣有り。其の狀は羊の如くして四角、名づけて土螻と曰ふ。是れ人を食らふ。
>
> （有獣焉。其狀如羊而四角、名曰土螻。是食人。）

とあるように、羊に似た動物が崑崙山にいることが分かる。また、西戎の一とされる羌人は『説文解字』の段玉裁の注によれば「羌、西戎なりて、牧羊人なり。」（羌、西戎、牧羊人也。）とあるように西方の牧羊族であった。白川静氏が、羌人の聖地は岳であり、卜文の岳は図4のように山上に羊の形をしるしている[16]、と指摘されるように、彼らは羊を神聖視していた。このことからも羊と西方との関係が窺える。

猿は『山海経』海内西経に、

> 開明の南に樹・鳥の六首なるもの、蛟・蝮・蛇・蜼・豹・鳥秩樹、于(もつ)て池に表するの樹木・誦鳥・鵪・視肉有り。

---

[16] 白川［2000］p 110-111参照。

（開明南有樹・鳥六首、蛟・蝮・蛇・蜼・豹・鳥秩樹、于表池樹木・誦鳥・鶴・視肉。）

とあり、崑崙山に蜼という尾の長い猿が住んでいることが分かる。

このように満城漢墓出土の博山炉には、崑崙山の象徴である虎・豹、また他にも関係の深い動物が描かれていたことが確認できる。

三．博山炉の形態と崑崙山

1．蓋の重層構造と崑崙山

先の考証から、満城漢墓出土の博山炉の動物意匠と崑崙山に住む動物に多くの共通点が見受けられた。では、次に博山炉の形態に見える崑崙山の特徴を見ていこうと思う。

博山炉の最も大きな特徴は山型の蓋である。先に挙げた『西京雑記』第一に「九層博山香爐」とあるように、いくつもの層をなして聳える険峻な山の峰が博山炉には表わされている。

崑崙山の形態は、『釋名』釋丘には、

三成を崑崙の丘と曰ふ。崑崙の高くして積み重なるが如きなり。

（三成曰崑崙丘、如崑崙之高而積重也。）

とあり、これによると、三つの部分から成っているものを「崑崙丘」といい、その理由は崑崙山が高く積み重なった重層構造であるからだということが分かる[17]。さらに『淮南子』地形訓には、

中に増城の九重なる有り、其の高さ萬一千里百一十四歩二尺六寸。

（中有増城九重、其高萬一千里百一十四歩二尺六寸。）

とあり、『楚辞』天問の王逸の注には、

淮南に言ふ、崑崙の山は九重なりて、其の高さ萬二千里なり。二は或は五に作る。

（淮南言、崑崙之山九重、其高萬二千里也。二或作五。）

とあり、崑崙山は九層であったとも考えられていた。

さらに『淮南子』本経訓に「大厦曾加して、昆侖に擬ふ。」（大厦曾加、擬於昆侖。）とあるように、漢代では大きな屋根を幾層にも重ねた建物を崑崙山になぞらえていたことが分かる。また『文選』甘泉賦にも、

是に於いて大厦、雲のごとく譎（あや）しく波のごとく詭（あや）しく、摧嵬（さいすい）として觀を成す。〔中略〕帝居の縣圃に配し、泰壹の威神に象る。

（於是大厦、雲譎波詭、摧嵬而成觀。〔中略〕配帝居之縣圃兮、象泰壹之威神。）

とあり、甘泉宮の建物の雲のように波のように高々と積み重なって観となっている様子を崑崙にある天帝の住まいか、天上の太一神の紫微宮に例えている。

このように崑崙山は三層ないし九層であると考えられ、また崑崙山を象った建造物は重層構造

[17] 曾布川寛氏も「崑崙という言葉が本来もつ重層の意味合いと関係があろう。」というように崑崙山が重層構造であることを述べておられる。曾布川［1979］を参照。

であることから、漢代の人々にとって、重層構造であるものは崑崙山であるという観念の存在が窺える。

2．円形の蓋と崑崙山

博山炉の蓋には山岳重畳文が刻まれているだけでなく円形という特徴もある。『六書故』巻29には、

凡そ物の圜渾なるは昆侖と曰ふ。

（凡物之圜渾曰昆侖。）

とあり、円形のものは昆侖と呼ばれていたことが分かる。また『神異経』中荒経には、

昆侖の山に銅柱有り、〔中略〕囲三千里にして、周圓にして削るがごとし。

（昆侖之山有銅柱焉、〔中略〕囲三千里、周圓如削。）

とあり、崑崙山の周囲は円く削ったようになっている。白川静氏も崑崙山の形態については「崑崙はけわしくて山容が全体として円形をなすもの」[18] と述べておられる。さらに『十洲記』（『水経注』巻1所引）には、

崑崙山は西海の戌地、北海の亥地に在り、〔中略〕上に三角有り、面ごとに方廣萬里。形は偃盆の如く、下は狭く上は廣し。故に崑崙と曰ふ。

（崑崙山在西海之戌地、北海之亥地、〔中略〕上有三角、面方廣萬里、形如偃盆、下狭上廣、故曰崑崙。）

とあり、このことから崑崙山は伏せた盆のような形であるということが分かる。盆は図5のように円形をしている。以上のことから、崑崙山の形態は円形であると考えられる。

また、盆は蓋としても利用されていた。図6は甑と釜と盆であるが、これはそれぞれ単独で用いるのではなく、通常、釜の上に甑を載せて図7のように使用していた。甑の底には図8のように穴が開いており、下の釜で湯を煮て、その蒸気によって甑に入れた穀物を蒸していた[19]。しかし、蒸すためには蓋が必要であり、図6の盆はその蓋として利用していた。孫機氏によれば、この方法は戦国の晩期には始まっていたようである[20]。また『道經』（『譚苑醍醐』巻1所引）に、

崑崙の山〔中略〕八海の閒に在り。上は天心に當たり、形は偃蓋の如し。

（崑崙之山〔中略〕在八海之閒。上當天心、形如偃蓋。）

とあり、先の『十洲記』では「偃盆」であったものが、「偃蓋」となっていることからも、「盆」と「蓋」が同義であることが分かる。ならば、崑崙山の形態は伏せた蓋のようなものであったと考えられる。つまり崑崙山には蓋のイメージがあったのである。

では、東方の仙山である蓬莱・瀛洲・方丈の形態はというと、『文選』西京賦に、

18　白川［1994］ p 921参照。また、崑崙が語源的に「丸い」を意味するということに関しては、鐵井［1975］を参照。

91　林［1976］ p 224-225参照。

20　孫機［1991］ p 332に「戦国晩期還有在甑上蓋以盆者，如陝西大荔朝邑212号戦国墓所出之例。」とある。

瀛洲と方丈を列ね、蓬萊を夾(はさ)んで駢(なら)び羅(つらな)り、上は林岑(りんしん)として以て壘崿(らいさい)、下は嶄巖(ざんがん)として以て嵒齬(がんご)なり。

（列瀛洲與方丈、夾蓬萊而駢羅、上林岑以壘崿、下嶄巖以嵒齬。）

とあり、また唐の張銑の注には、

銑曰く、林岑・壘崿・嶄巖・嵒齬、上下に皆険峻にして齊はざるを言ふなり、と。

（銑曰、林岑・壘崿・嶄巖・嵒齬、言上下皆険峻不齊也。）

とあるように、この蓬萊・瀛洲・方丈の三仙山は険しい山である。しかし、時代は下るが晋の王嘉の『拾遺記』に、

三壺は則ち海中の三山なり。一に曰く方壺、則ち方丈なり。二に曰く蓬壺、則ち蓬萊なり。三に曰く瀛壺、則ち瀛洲なり。形は壺器のごとし。此の三山、上廣・中狹・下方にして、皆工制せしがごとく、猶ほ華山の削成するに似るがごとし。

（三壺則海中三山也。一曰方壺、則方丈也。二曰蓬壺、則蓬萊也。三曰瀛壺、則瀛洲也。形如壺器。此三山、上廣・中狹・下方、皆如工制、猶華山之似削成。）

とあるように「蓋」の特徴は備えていない。また『拾遺記』に、三仙山と似ていると言われている華山の形態も『山海経』西山経に、

又西六十里を、太華の山と曰ふ。削成して四方なり。

（又西六十里、曰太華山。削成而四方。）

とあるように、これもまた「蓋」の特徴を備えた山ではない。よって、博山炉の「円形で重層構造の蓋」という特徴を備えた山は崑崙山のみなのである。

3.「下狹上廣」・承盤と崑崙山

これまでの考察から、崑崙山には「重層構造」「円形」「蓋」という特徴があることが明らかになった。しかし、蓋だけでなく、博山炉の形態は「山型の器身部分を細い脚部が支えている」ことや承盤があることも特徴の一つである。

博山炉は山（蓋）の部分とそれを支える脚部とを比べると、明らかに下が狹く上に向かうにつれて広がっていく形態になっている。これは全ての博山炉に共通するものである。そこで崑崙山の形態を見てみると、先に挙げた『十洲記』（『水経注』巻1所引）には、

形は偃盆の如く、下は狹く上は廣し。故に崑崙と曰ふ。

（形如偃盆、下狹上廣。故曰崑崙。）

とあり、崑崙山は、下が狹く上が広いという構造になっており、このような形態だから「崑崙」と呼ばれることが分かる。そして、この特徴は博山炉の形態の特徴と一致する。

また、承盤であるが、蓬萊山説ではこれを海と解釈していた。しかし、これまでの考察が正しいと認められるならば、『山海経』西山経に、

河水焉より出でて、南流し、東して無達に注ぐ。赤水焉より出でて、東南流して汜天の水に注ぐ。洋水焉より出でて、西南流して醜塗の水に注ぐ。黒水焉より出でて、西して大杅に流る。

（河水出焉、而南流東注于無達。赤水出焉、而東南流注于汜天之水。洋水出焉、而西南流注于醜塗之水。黒水出焉、而西流于大杅。）

とあるように、崑崙山の四方から流れ出る河水・赤水・洋水・黒水と解釈できると思われる[21]。

このように、博山炉は蓋だけでなく、香炉全体が崑崙山の形態と共通の特徴があるのである。

四．博山炉の天の特徴と崑崙山

1．博山炉に見える天上の意匠

先に挙げた満城漢墓で発掘された博山炉（図２）の中に大変興味深い意匠がある。それは龍・虎・鳥・駱駝が描かれていることである。これは恐らく青龍・白虎・朱雀・玄武の四神であると考えられる。玄武の意匠は四神の中でも最も後に決まったものであり、『史記』匈奴列伝に、

其の畜の多き所は、則ち馬・牛・羊、其の奇畜は、則ち橐駝・驢贏・駃騠・騊駼・驒騱なり。

（其畜之所多、則馬・牛・羊、其奇畜、則橐駝・驢贏・駃騠・騊駼・驒騱。）

とあり、「橐駝」は駱駝のことである。このように駱駝が北方に生息する動物であることから、この場合は駱駝を北に当てたと考えられる。また、図９のように玄武と朱雀の上に山が載っている博山炉もある。

四神のことに関しては、『論衡』龍虚に、

天に蒼龍・白虎・朱鳥・玄武の象有りや、地にも亦た龍・虎・鳥・龜の物有り。

（天有蒼龍・白虎・朱鳥・玄武之象也、地亦有龍・虎・鳥・龜之物。）

とあり、天には青龍・白虎・朱鳥（朱雀）・玄武などの四神の形象があると考えられていた。

また、陝西省で発見された前漢代の交通大学壁画墓の天井には四神とその他の瑞獣・霊鳥と星の図案が描かれている（図10）。これに関して黄佩賢氏は「四神は墓の天井の四面に置かれて、方位の意味を表わしており、四神とその他の瑞獣と星座の図案は同時に、このアーチ型の墓の天井が、もう完全な宇宙の縮図に転化されたことを明示している。」[22] と述べておられる。このように墓の天井に四神が描かれているのは、そこに天をイメージしているからである。

また、この博山炉には牛を牽く人物が描かれており、図11の博山炉にも牛に乗った人物が描かれている。しかし崑崙山は牛とは直接関係がない。では、これをどのように解釈できるかというと、これは牽牛であると考えられる。牽牛については『史記』天官書に「牽牛を犠牲と為す。」

[21] 崑崙山から四河川が流れ出ることは、海野［1958］において詳しく考察されているので参照のこと。

[22] 陳江風［2004］p 167に「四霊被置于墓頂的四面以表示方位的意義，他們与其他霊獣和星象図案同時顕示出這拱形的墓頂已被転化成整个宇宙系統的縮影。」とある。

（牽牛為犠牲。）とあるように牽牛星があり、それは祭祀に用いるための犠牲の牛を司る星座である。また、南陽漢画像石（図12）にも天の星々と共に牛を牽く人物が描かれている。これもまた天上をイメージした図案であると考えられる。

以上のように博山炉には、四神や牽牛などの天上の意匠が施されていた。

2．植物意匠に見える天

前漢以降、図13のように、脚部に四枚の花弁のようなものが付随している博山炉が多数発見されている。この模様に関しては林巳奈夫氏が詳細に研究しておられる。氏は図14のような墓室の天井に描かれている華を『文選』魯霊光殿賦の「圓淵方井に、反に荷蕖を植う。」（圓淵方井、反植荷蕖。）すなわち天井の円形の淵と方形の井戸には蓮を逆さまに植えるという記述を例に挙げて、蓮華であると解釈しておられる[23]。

蓮華と崑崙山の関係と言えば、若木が考えられる。『淮南子』地形訓に、

若木は建木の西に在り、末に十日有りて、其の華、下地を照らす。

（若木在建木西、末有十日、其華照下地。）

とあり、また高誘の注には、

末、端なりて、若木の端に十の日有り、状は蓮華の如し。華は猶ほ光のごときなりて、光は其の下を照らすなり。

（末、端也、若木端有十日、状如蓮華。華猶光也、光照其下也。）

とある。若木は、その梢に十の太陽があって、それは蓮華のような形をしており、その光が地上を照らしているという。この若木は『楚辞』天問に、

崑崙の縣圃、其の尻（お）るところ安くにか在る。〔中略〕羲和（ぎか）の未だ揚がらざる、若華何ぞ光れる。

（崑崙縣圃、其尻安在。〔中略〕羲和之未揚、若華何光。）

とあり、『山海経』海外東経の王逸の注に、

若木は昆侖の西極に在り、其の華は下地を照らす。

（若木在昆侖西極、其華照下地。）

とあるように、崑崙山にも生えている。したがって、博山炉の蓮華はこの若木であると考えられる。

また、この蓮華は天の象徴でもあった。林巳奈夫氏は、図15のような画像磚を例に挙げ、「それ（蓮華）は四神によつて代表される天の四方の星座の中央にあり、天の中央の星座群を代表する天極星の中の中心的な星を表はし、そこに位する太一の神を象徴するものであつた。」[24] と述べておられる。よって、博山炉の蓮華は、崑崙山にある若木を表わしているのと同時に、天の象徴

[23] 林［1987］参照。
[24] 林［1987］参照。

でもあった。

さらに、茂陵で発見された博山炉（図16）は脚部が竹の形をしている。竹は『文選』蜀都賦の注に「圓きこと竹の如し。」（圓如竹。）とあるが、中国古代において「円形」のものと言えば、やはり天であると思われる。『淮南子』天文訓に「天は圓、地は方。」（天圓地方）とあるように、天は円形をしていたと考えられていた。つまり、竹は円形の物であり、天の形であると意識されていたのである。また、図17の筒形金具は、馬車の部品の一部である。中国古代の多くの馬車には座席の上に傘（蓋）がつけられおり、その傘の取り外しができるように、柱の部分の中部において上下二本の管を組み合わせたのがこの金具である[25]。これは竹の形をしており、そこには山と多くの動物が描かれている。この特徴は博山炉の円形の蓋に多くの動物が描かれていることと同じである。

以上のように、博山炉の意匠には、四神や牽牛、蓮華や竹という天と関係のある意匠があるが、蓮華は崑崙山の特徴でもあり、また天のイメージのある竹に山岳や動物が描かれていた。ならば、天と崑崙山は関係があるのではないだろうか。

3．天の意匠と崑崙山

実は天と崑崙山は密接な関係があった。『山海経』西山経には、

西南四百里を、昆侖の丘と曰ふ。是れ實に惟れ帝の下都なり。

（西南四百里、曰昆侖之丘。是實惟帝之下都。）

とあり、崑崙山は天帝の地上での都であるという特徴を持っていた。曾布川寛氏も「帝の下都は、晉の郭璞が、『天帝の都邑の下に在る者なり』と注するように、天上にある天帝の都に對して、地上に置かれた天帝の都をいう。これこそ他の神山と異なる崑崙山だけの特徴である。崑崙山は確かに地上に聳える山だが、天帝の直轄する都として、地上ではなく天上に屬する聖域であった。」[26] と述べておられる。

このように崑崙山は天帝の地上での都という、他の神山にはない特徴を持っており、天と密接な関係があることが分かる。

また、崑崙山の形態に関しても、円形であるという特徴が天と合致する。そして『淮南子』天文訓に「天に九重有り。」（天有九重。）とあり、『楚辞』天問には、「圜則は九重なりと、孰か之を營度せる。」（圜則九重、孰營度之。）とある。この圜とは『説文解字』に「圜は天體なり。」（圜、天體也。）とあるように天を指している。よって天の形態は九層であり、この特徴も崑崙山の形態と一致するのである。

さらに、天には「蓋」と密接な関わりがあるという特徴を有している。『淮南子』泰族訓には、

---

[25] 曾布川・谷［1998］p364参照。

[26] 曾布川［1979］参照。

天都の蓋の若く、〔後略〕

（天都若蓋、〔後略〕）

とあり、また『淮南子』原道訓に、

天を以て蓋と為し、地を以て輿と為し、四時を馬と為し、陰陽を御と為し、雲に乗り霄（そら）を陵（しの）ぎ、造化者と俱（とも）たり。

（以天為蓋、以地為輿、四時為馬、陰陽為御、乗雲陵霄、與造化者俱。）

とあるように、中国古代の人々にとって、天は「蓋」であった。この特徴もまた崑崙山と一致する。

このように、天の特徴である「円形」「九層」「蓋」という特徴は全て崑崙山にも当てはまるのである。これは、御手洗勝氏が「崑の本義は何であろうか〔中略〕「天體」に外ならないと考えられる。云わばそれは天體のこの地上に舞下つたものに外ならないのである。であるからこそ、それが天帝の下都であるのであり、又天と同じく九重なのであり、山上にある玄圃をさらに登ると、天帝の坐所たる北辰に至り得るのは當然であつた。」[27] と述べておられるように、天帝の下都である崑崙山の形態は天の形態そのものなのである。したがって、博山炉の原型は、天の特徴を有している崑崙山であると考えられる。

おわりに

以上、博山炉の原型が何であるのかということについて、名山を象っているという従来の説を出発点に、多くの出土物と文献史料を照らし合わせながら検討した。

初期の博山炉である満城漢墓出土のものには、西王母や陸吾などの崑崙山に住む神仙の体の特徴であった虎・豹が描かれており、それらは崑崙山を象徴する動物であった。また、他にも崑崙山に住んでいる動物が多く描かれていた。

博山炉の形態の特徴は「円形」「重層構造の山型の蓋」「下狭上廣」であるが、全てが崑崙山の特徴と合致した。さらに博山炉には天を象徴する意匠が描かれているが、崑崙山と天は共通の特徴を持つものであった。なぜなら崑崙山が天帝の下都であり、天の形態そのものという他の山にはない特徴を有するからである。

したがって、博山炉が崑崙山の特徴を持ち、更に崑崙山と同じく天の特徴を持つことから、博山炉の原型は崑崙山であると言える。

---

[27] 御手洗［1950］参照。

参考文献

日文・書籍

下中彌三郎編［1952］『世界美術全集』第７巻　平凡社

小杉一雄［1959］『中国文様史の研究　殷周時代爬虫文様展開の系譜』新樹社

林巳奈夫［1976］『漢代の文物』京都大学人文科学研究所

樋口隆康　編著［1988］『古代中国の遺産』（世界の大遺跡⑨）講談社

神田信夫・山根幸夫　編［1989］『中国史籍解題辞典』燎原書店

中野美代子［1991］『ひょうたん漫遊録　記憶の中の地誌』朝日選書

白川静［1994］『字統』平凡社

曾布川寛・谷豊信　責任編集［1998］『秦・漢』（世界美術大全集　東洋編第2巻）小学館

白川静［2000］『白川静著作集２　漢字Ⅱ』平凡社

愛知県陶磁資料館　他　編集［2005］『陶器が語る来世の理想郷　中国古代の暮らしと夢――建築・人・動物』愛知県陶磁資料館　他

小田部英勝　編集［2006］『始皇帝と彩色兵馬俑展～司馬遷『史記』の世界』TBS テレビ・博報堂

日文・論文

長井行［1903］「博山香爐と飛鳥遺物」（『考古界』第３篇第８号）

重田定一［1904］「博山香爐考」（『史学雑誌』第15巻第３号）

御手洗勝［1950］「崑崙傳説の起源」（『史学研究記念論叢』）

海野一隆［1958］「崑崙四水説の地理的思想史的考察――仏典及び旧約聖書の四河説との関連において――」（『史林』第41巻第５号）

鐵井慶紀［1975］「崑崙伝説についての一試論――エリアーデ氏の「中心のシンボリズム」に立脚して――」（『東方宗教』第45号）

曾布川寛［1979］「崑崙山と昇仙圖」（『東方学報（京都）』）

林巳奈夫［1987］「中國古代における蓮の花の象徴」（『東方学報（京都）』第59冊）

全榮來［1996］「香炉の起源と型式変遷」（『古代文化』第48巻1号）

中文・書籍

中国社会科学院考古研究所編輯［1980］『満城漢墓発掘報告』上　文物出版社

中国社会科学院考古研究所編輯［1980］『満城漢墓発掘報告』下　文物出版社

孫機［1991］『漢代物質文化資料図説』文物出版社

陳江風［2004］『漢文化研究』河南大学出版社

金燕　責任編輯［2006］『漢画解読』文化芸術出版社

中文・論文

湖南省博物館［1966］「長沙湯家嶺西漢墓清理報告」（『考古』第4期）

湯池［1979］「西漢石雕牽牛織女辨」（『文物』第2期）

平朔考古隊［1987］「山西朔県秦漢墓発掘簡報」（『文物』第6期）

韓文・論文

趙容重［1994］「中国博山香炉에 관한考察（上）」（『美術資料』第53輯）

参考図出典

図１　『満城漢墓発掘報告』下　図版30・『満城漢墓発掘報告』上　p 65　図45

図２　『満城漢墓発掘報告』下　図版175・『満城漢墓発掘報告』上　p 257　図171

図３　『漢代の文物』p 85　図5-44

図４　『白川静著作集２　漢字Ⅱ』p 111

図５　『満城漢墓発掘報告』下　図版24・『満城漢墓発掘報告』上　p 54　図35

図６　『満城漢墓発掘報告』下　図版170

図７　『漢画解読』p 155

図８　『満城漢墓発掘報告』下　図版83

図９　『文物』1987年6期　図版3

図10　『漢文化研究』図1.1・1.2

図11　『陶器が語る来世の理想郷　中国古代の暮らしと夢――建築・人・動物』p 105　図108

図12　『文物』1979年2期　p 88　図3

図13　「中国博山香炉에 관한考察（上）」図6

図14　「中國古代における蓮の花の象徴」図3（2）

図15　「中國古代における蓮の花の象徴」図44

図16　『始皇帝と彩色兵馬俑展～司馬遷『史記』の世界』p 171　図96

図17　「中国博山香炉에 관한考察（上）」図28

参考図

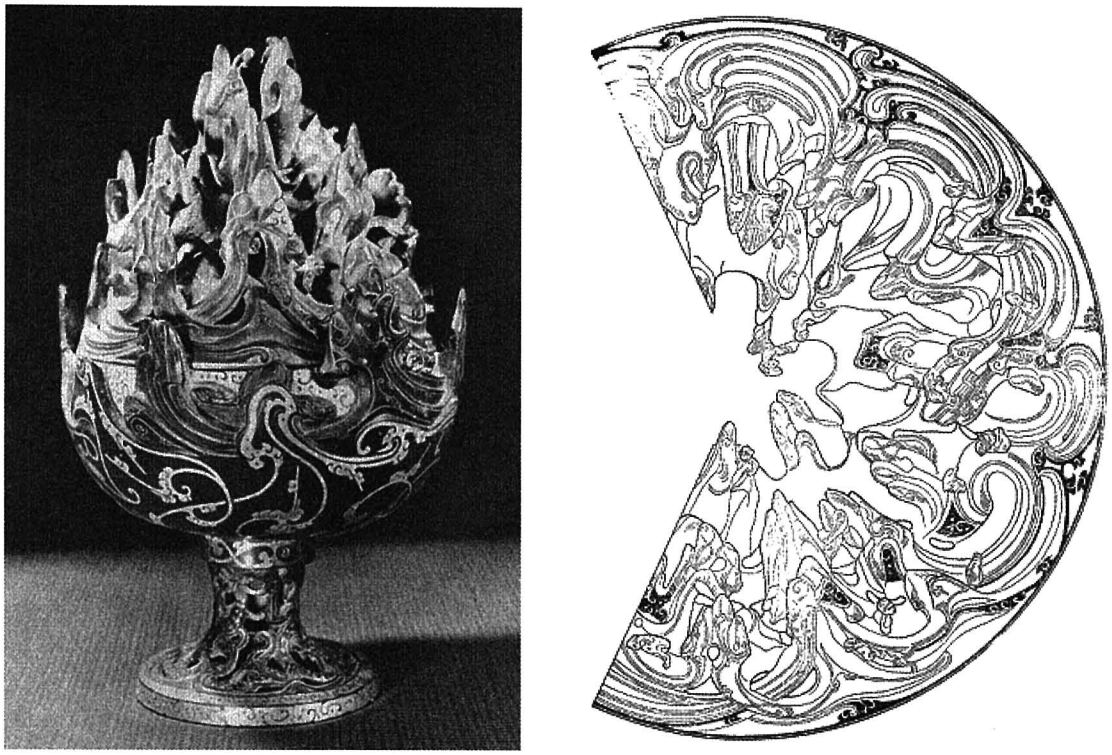

図１　銅錯金博山炉と炉蓋の展開図　満城一号墓出土（前漢中期）

図２　承盤付随の博山炉と炉蓋の展開図　満城二号墓出土（前漢中期）

図3　山型蓋ではない香炉　長沙馬王堆出土（前漢初期）

図4　卜文「岳」

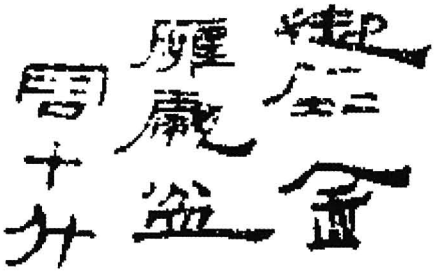

図5　盆とその銘文　満城一号墓出土（前漢中期）

図6　釜・甑・盆　満城二号墓出土（前漢中期）図7　厨房画像石（後漢）

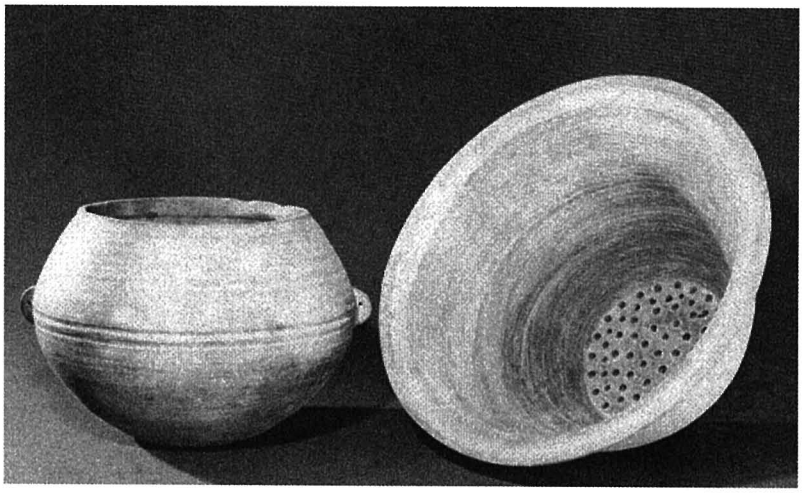

図8　釜・甑　満城一号墓出土（前漢中期）

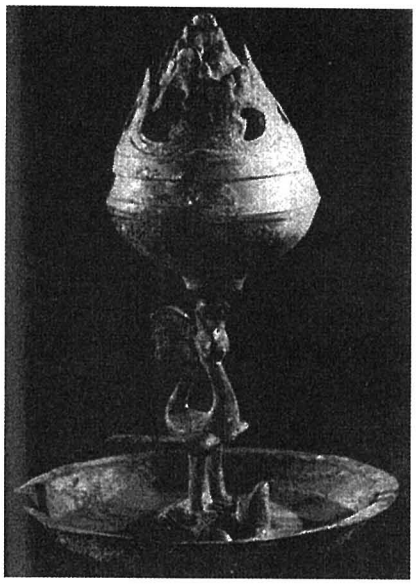

図９　朱雀・玄武博山炉　山西朔県秦漢墓出土（前漢中期）

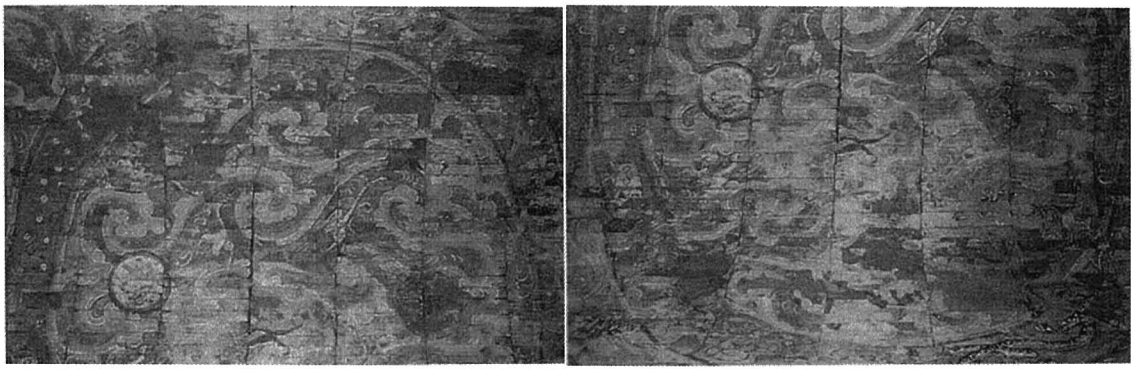

図10　交通大学壁画墓の天井に描かれた天文図（前漢晩期）

図11　牽牛の描かれた博山炉（漢代）

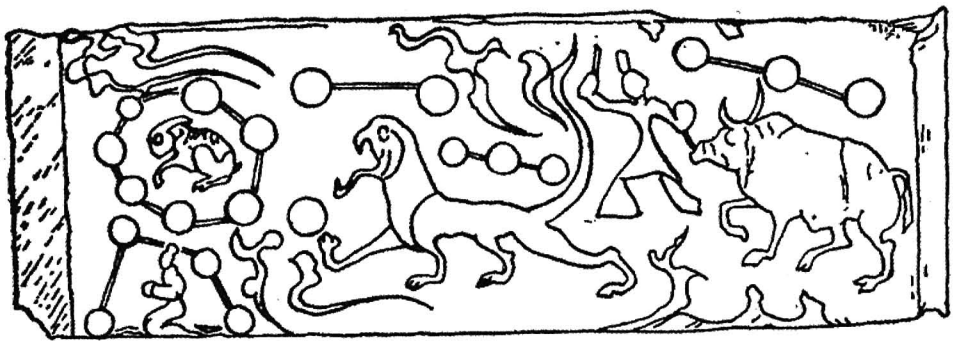

図12　南陽漢画像石に描かれた牽牛（後漢）

図13　蓮華博山炉（前漢）

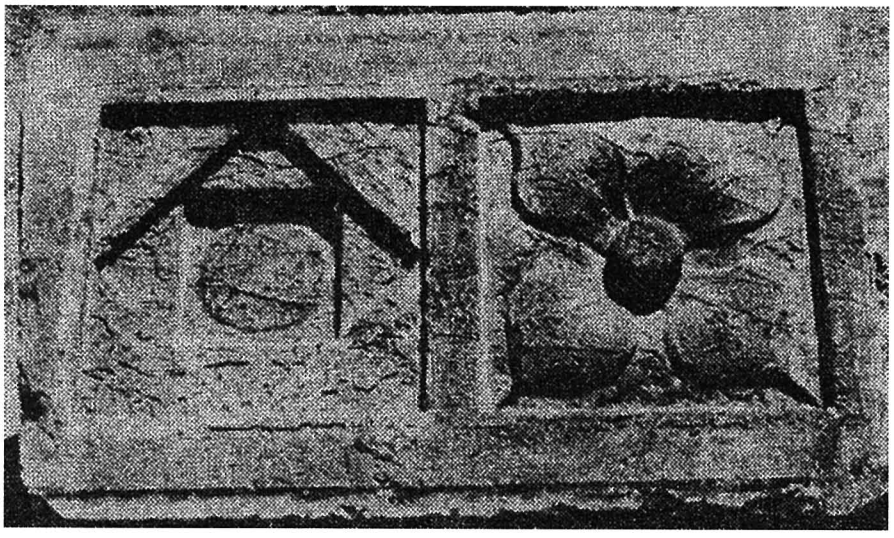

図14　墓室の天井に描かれた蓮華　沂南画像石墓（後漢）

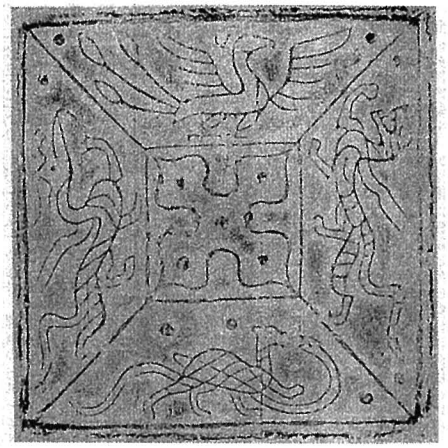

図15　四神と蓮華（漢代）

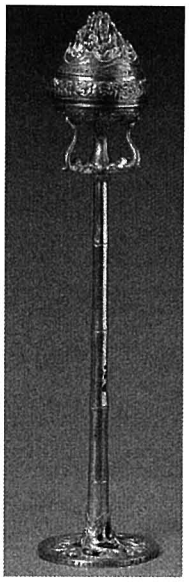

図16　脚部に竹を象った博山炉　茂陵陪葬坑出土（前漢中期）

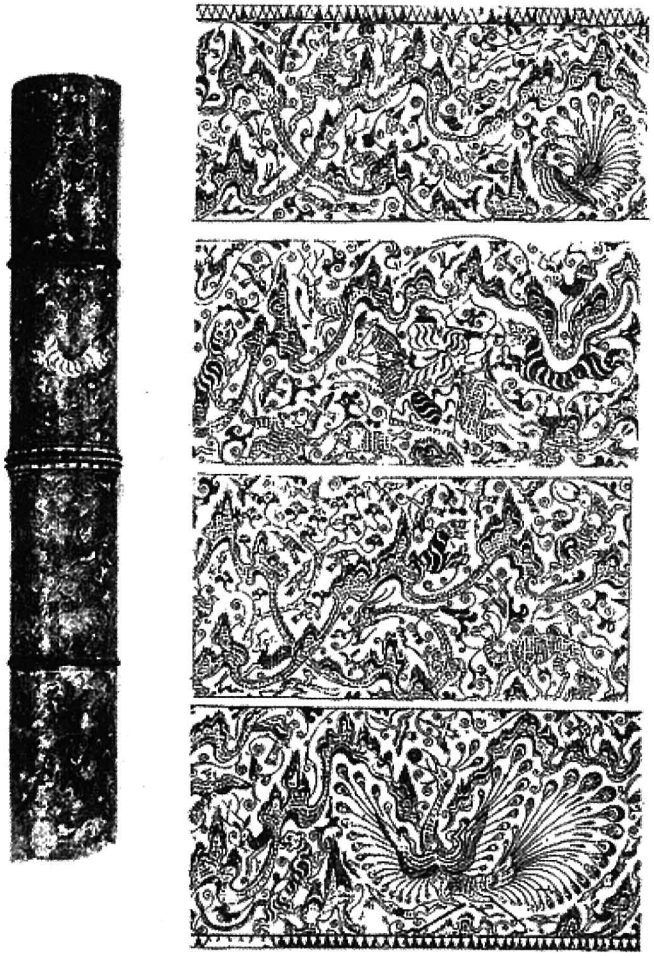

図17　竹を象った筒形金具　平壌出土（漢代）